

## 全体会議（座長ディスカッション）

菅野 皆様、二日間お疲れ様でした。分散会の中でも、大きなテーマであったということもあり、皆様にそれぞれ色々なことを語っていただきました。

今回は、前もって私の方で話をお聞きして、座長に問いを投げかけて全体会議という形にさせていただきました。そして最後に、所長から総括をいただいて中央教研を終わりたいと思います。

分散会は、第一分散会から第六分散会までございました。それぞれ、特色のある意見を出していただいたように思います。

余談ですが、第三分散会に伺ったときに、狭めの部屋でしたが皆さん話しやすそうに自由に意見を言っておられました。会議の雰囲気がとてもよかったので、会議をする上で部屋の広さというのは意外に大切な部分であると思います。

それでは改めまして、最後の全体会議ということで、座長ごとの意見の交換をさせていただいて、中央教研を締めたいと思います。昨日は池上萬奈先生、それから鶴飼秀徳先生、赤堀所長に話をしていただきました。それぞれのお話の中で、大変重要なポイントが含まれておりました。

さて、分散会の中では、「戦争」と「平和」という二つの大きなテーマがありました。大体、「戦争とは何か」あるいは戦争の時にどうするかということも含めて、話し合われました。本日は、「平和とは何か」あるいは来年終戦八

十年になりますから、そのことも含めてどのように話し合っていくかということが問われました。

まず、戦争についてのことですが、もし私たちが今昭和の戦中と同じような状況になると仮定した時に、私たちはどのように行動するのか。鵜飼先生のお話でもありませんでしたが、戦中も抵抗している方は、戦争に絶対反対だと言っている方もいましたが、そういう方々は僧籍を剥奪されたりした、あるいは地方には地元独特の強固なネットワークがあつて、お寺を中心とした村落のネットワークによって、みんな何となく右へ倣えの状況があつたと言われております。

そういつた中で、私たちが戦争にあつたらどう行動するのか、色々とお話があつたようでありますから、まずこの辺についてお聞きしていきたいと思えます。まず第二分散会、灘上上人でしょうか。

灘上 第二分散会でも同じような質問を投げかけました。当然、市民としての義務と申しますか、国民としてそういった状態になつたら、自分は当然戦争反対だし、戦争にも行きたくないし、人も殺めたくない。しかし、国民としてそのような形で戦争には行つてしまふだろうという方も、中にはいらつしゃいました。また一方で、絶対平和主義というのでしょうか、戦争には絶対加担しないということで、意見を述べられる方もいらつしゃいました。

ただ、昨日の鵜飼先生のお話もございましたので、今お話ありましたように、例えば僧籍を剥奪され、ご自分が社会から隔絶した状態になる。そのようなことが想定されるということに対しては、それであれば、自分は仏教者として人を殺めたくないで還俗してでも行かないというような方もいらつしゃいました。他の方で、極論自らの命を絶つたとしても人を殺めたくない、そのような思いを述べてくださる方もいらつしゃいました。皆さん非常に正直にどうか、人前ではなかなか言いにくいことも言ってくれるような雰囲気、運営できたと思えます。

菅野 ありがとうございます。続きまして第五分散会、河崎上人いかがでしょうか。

河崎 第五分散会の河崎でございます。第五分散会の中にも、灘上上人が仰ったように、もし戦争になったらというようなことも議論の中になりました。第五分散会ではまず三つのグループに分けて、それぞれ意見を頂く形で行いました。その中で、北海道のお上人が「実は北海道はロシア・ソ連の脅威があるという部分と、もし戦争になったら私は絶対に戦争には加担しないという、平和に対しての自分自身、僧侶としての生き方というものを感じる」という貴重なお話をいただくことができました。

菅野 ありがとうございます。第六分散会でもそのようなお話があったと思います。

柴田 第六分散会の柴田です。私は分散会が始まってすぐに「絶対平和主義の方いらっしゃいますか」と、聞いてまいりました。お一人いらっしゃいました。この方は当初「僧侶は祈ればいいんです」と仰っていました。戦争が始まるかもしれないのに祈ればいいという言い方はどうなのかなと、最初は思っていました。よくよくお話を聞いてみますと、それだけではないお考えをしっかりと持っておられ、その後、この深い議論に大変寄与していただけたと思っております。

後の方は、元自衛隊隊員という方もいらして、この方は、「自衛隊にせよ、警察にせよ、消防にせよ、命令がなければ動けないんだ、何もできないんだ」ということを仰っていました。我々は、その前に色々と考えておかなければならないということは、本当に大事なんだなというようなことを話し合いました。

菅野 ありがとうございます。ちなみに昨日鵜飼先生が、大学でアンケートを取ったと仰っていました。その中で、戦争が起こるとなった時に自分はどうかというようなアンケートを取った際、戦前のように、致し方なければ国の方針に従うみたいなお返があったという話がありました。その件につきましては、第四分散会の方で意見があったようなので、その辺りについて述べていただけますでしょうか。

石原 第四分散会の石原です。鵜飼先生からは唐突な結果を言われたので、皆さん面食らったのではないかと思います。ある方のご意見で、本心じゃないと思いますが、「戦いには行きます」と言ったので、私は、「戦いに行く」と人を殺さなくてはなりません、そうなった場合にどうしますか」という問いかけをしました。そしたらやはり宗教者ですから、そこに葛藤があるというように私は見させていただきました。

菅野 ありがとうございます。続きまして、戦争を語ることの危うさというのがあります。先ほど第四分散会でもいわゆる情報の発信がどこから出ているのかということによって、我々は戦争を一方からしか見ることができないのではという意見もございました。だからそれにつきましても、公正な目で見るということが非常に大切なのだろう。しかしながら、それがなかなかやりづらいというようなことも、意見としてございました。

これも第四分散会になりますが、どうすれば戦争は起きないのか、石原上人、何かございませんか。我欲を抑制するとか、その辺のことについていかがでしょうか。

石原 戦争というものを考える時に、皆さんもそうですが、その前の段階で何をしたらいいかということ、大事になってくる。特別研究員の櫻井先生は、その場合に戦争を起こさないために何が必要かと言うと、お互いに自分の

こと、相手のことを理解し合うことが必要なのだと。ですから、自分は間違いないということをお互いに言っていたら話は進まない。逆に言うと、日常的に意見が違ふときには、どうしたらいいかということを考える、安全弁が必要だというお話をされました。ということは、どういう形の安全弁なのか、例えば法的なものやモラルの安全弁もありますが、そこからいわゆる平和への道筋というものを考えることが大事ではないかと、櫻井先生は述べられました。

もう一つには、情報・教育も同じですが、我々がどのような目線でその真実を見極めるのかということ、これも戦争を起ささないために必要なことだと思います。我々は学校教育において歴史観を考える中で、一方的に教えられてそれで納得している部分もあるのではないかと思います。現在はSNSの情報伝達によって、手に取るように色々な情報を知ることができます。そこで大事なことはその中で、その真実を見極める目を我々がどのように養うのかということも大事なことだと思います。

**菅野** ありがとうございます。今のことと関連してきますが、どの分散会でも話題に出ていたのが、教育の問題です。教育をどのように行ってきたか、これからどう行かということ。これは平和につながる話でもあります。特に平和教育という視点でもいいのですが、教育というのはこれからどうあるべきか。これから我々が戦争を回避するためにどのような教育が必要かというのは、どの分散会でも話題となっていたようです。この点につきまして、第四分散会の石原上人からお聞きしましたので、他の分散会からもそれぞれお聞きしたいと思います。第一分散会からお願ひします。

**及川** 第一分散会の及川です。平和教育ですね。公立学校における公教育については、ほとんど話として出てきませ

んでした。出てきたのは本当に最後でしたね。最後に、「参加者の中に教育に携わっている方はいますか」というような投げかけをした中で発言された方は、「今の公教育の中では、宗教を教育の中に取り入れるということはできないことになっています」というような発言がありました。

**菅野** そういうことも含めて、今後我々がこうあるべきだというようなご意見が出たのであれば、それをお聴きしたい。教育に関してこうあるべきだとか、例えば戦前においては、皇国史観の教育を受けてきたから大いに影響を受けたと思います。戦後は平和教育と称するものが行われていますが、それでいいのか。あるいは今後は変化あるべきだとか、相手のことを理解するための平和教育というには、未だ不十分であるのかないのか、そういったことですね。

**及川** そういう趣旨の中での発言もありました。現在、八十年ほど平和の時代が続いている。平和という定義は色々ありますが、戦争をしていない時代が続いている。この一つの理由としては、やはり教育における成果というものがあるのではないかという意見がありました。否定的な意見ではなくて、肯定的な意見です。

**菅野** 肯定的ですね。ありがとうございます。続きまして、第二分散会、灘上上人どうでしょうか。

**灘上** 本日、分散会の中で皆さんが受けてきた自分の小学校からの平和教育という話を伺いましたが、やはりこれはその方々が育った地域によって、非常に平和教育は温度差があるということが分かりました。例えば空襲があったり、原爆が落とされているような被害を被ったところの地域の方は、小学校や中学校でも記念施設を見に行ったり平和教育が盛んです。一方であまり被害がないところはあまり記憶にないとか、自分のお爺さんやご親戚の方が戦争に行っ

ていて、その方から聞いたというのはあったとしても、小学校や中学校という公教育ではされていないという地域によって温度差があるということが分かりました。

また、今後の僧侶としての平和教育ということを考えると、これからの世代、お子さんに対して、例えば修養道場などを通して、平和とその大切さを伝えていかなければいけないという意見がありました。やはりベースには、どう平和を説いていくかというところで誰もが尊重されて、権利が守られるような社会を築くために物事を伝えていく。あとは、「自分とは違う意見を、どうしても自分に都合のいい解釈をして聞いてしまう。そうではなくて、反対意見にもちゃんと耳を傾けて、あとは聞きたくない意見に対しても自分の頭で冷静になって考えてみる。第三者的な目で、自分の意見と反対意見を比べることが、大切だ」というようなことが話されました。

菅野 ありがとうございます。では、第三分散会の加藤上人いかがでしょうか。

加藤 第三分散会、座長の加藤でございます。最初にそもそも皆さんに、各戦争に関する体験、聞いた話、これは当然世代的に実体験ということはないでしょうが、おじいさんから聞いたとか、檀家さんから聞いたというような話をしてください、といった話の中で、自己紹介をいただいたわけですね。その中で、自分のところのお子さんが小学校に通っていて、だんだん平和や戦争に関する教育がなされなくなっているのではと思う、というご発言がありました。一番若い二十代の参加者の方から、「私は、『はだしのゲン』を読んで大分ショックングであった」という話を聞きました。

ああ、そうだと思います。平和に関する、戦争に関する教育を、ご自身がどのように受けたか。また、お子さんがいらっしゃる方は、お子さんが今現在、小学校、中学校、高校でどのような教育を受けているか、ご承知ならばご

披露くださいということで発表していただきました。そこで思ったのは、各地域によって温度差があるということで、長崎や沖繩での経験がある方は、やはりそういった教育があつて、見聞きする機会が多かつたということを発表される方もいました。逆にあまりなかつたという方もいました。

私がこのことについて考えたのは、いま平和教育がされていることが大事だと思つたのは、実はみんなが平和に向くようにということもありますが、万が一戦争が起つた場合に、経験者の話を聞いておいた方がいいのではないかと、小学校かなんかで、洋服を着たまま水泳をするようですね。水に落ちたらどのように泳いだらいいかを教わるそうです。そういう場面になつたときの心構えを、少しでも若い方にも持つていただいた方がいいのではないかと。現状どういふ平和教育、戦争教育がされているのかということで、質問を投げかけた次第です。以上です。

菅野　ありがとうございます。続きまして、第五分散会の河崎上人お願いします。

河崎　はい。失礼いたします。第五分散会では、いま菅野主任が言つたように、教育という部分においてもご意見が多々ございました。その方向性といたしまして、日蓮宗と戦争の関わりについて、日蓮宗がいかに戦争に関わつていたのかというものを大正年間からまとめていただいたものと、それから、宗門が公に声明文を出しているもの、戦後の宗門の立正平和運動、それから海外における戦時下、どのように布教所というものが拡張されていったかという背景を、各々説明したうえで、辿り着いてきたのが、どうやったら戦争が防げるか。外交、特に宗門は公の宗教者の世界会議に出席する率がだんだん減つているよねというような問いかけとか、それから同時に出てきたのが今の教育でございます。

教育を行うにあつて、宗門としての平和論の構築が大切ではないかということが、分散会の中の三つの島の中で、

ほぼ全員がそのことを言っておられました。次世代に向けた教育活動ということで、できれば平和に特化した宗門の機構が必要ではないか、研究する部署、部門が必要ではないかという貴重なご意見もいただきました。

身近なものとしては、教化という部分に入ろうかと思いますが、お会式太鼓、池上本門寺や各本山でお会式があるかと思いますが、あの音調の太鼓を、リズムを平和の行進という形で、お祖師様の意に叶うような、現代風の見える化をやっても面白いのではないかと、前向きなご意見もいただきました。そういう意味で、教育というものは大事ではないかということになります。

**菅野** ありがとうございます。

平和において大切なことは何か。今教育の話が出ました。私もそれぞれの分散会を拝見していましたが、その中で多く出てきたのは、「対話」というものが大切なのではないかという視点です。昨日の赤堀所長のお話で公場対決みたいなものがありました。あのように各々意見を述べ合う、そして認め合うというようなこと、宗教間対話というものの方が大切なのではないかという意見は出てきたと思います。この点につきましてはどうでしょうか。どなたか、その点についてご意見ありますでしょうか。

**柴田** 少し面白い意見が出てきました。スターウォーズが好きだという方がいらつしゃいまして、ジェダイの騎士というのが出てくる。このジェダイの騎士というのは同盟軍側と帝国軍側とありますが、同盟軍側のオブザーバーのような存在です。ジェダイの騎士が交渉をしに行くそうです。ジェダイの騎士は軍隊を持って交渉するわけじゃない、単身乗り込んで交渉してくるのだという話が出てまいりまして、「われわれ僧侶という立場の者が、ジェダイの騎士そのままの振る舞いをするというわけではありませんが、ジェダイの騎士のような立ち位置であれたら理想ですけど

ね」みたいな、そんなお話が出てまいりました。

菅野 それは、僧侶がフォースの力を持ってなきやいけないですよ。そうでないと、一人で乗り込んでいくのは難しいということ。他にありませんでしたか。私いろいろ聞いたような気がしますが、河崎さんどうでしょうか。

河崎 第五分散会の方でも、実は宗教間対話がどのような場面で必要となってくるのか、それは外交の場ではないか。外交の重要性、それから宗門も私たち一人ひとりがそういう社会に出て、社会に対して日蓮聖人の御教え、法華経の教えのもとに、平和というものをちゃんと説いていくことから始めていく。それが外交にも通じていくのではないか。国同士の外交、人との外交、それから宗教間との外交にも、先ほど第二分散会のお話にもありましたように、ちゃんと耳を傾け、門戸を開き、そして法華経は開会の教えであるというスタンスを持ったうえで、我々は臨んでいくべきではないかと思えます。

菅野 ありがとうございます。次に、我々自身の宗教者、仏教者、日蓮宗の教師としての布教活動、教化、教化に行かなくても毎日の供養などの中での話でございます。

ちよつと印象的なお話が、第四分散会でありました。森光寛上人にお話をいただきましたかと思えますが、いわゆるお位牌の話とか、ご自坊が長崎ということもありまして、その辺のお話をもう一度、繰り返しお話しただけかもしれません。供養の意味について。先ほど、第四分散会でお話になったことをお願いします。

森 憎越ながら、長崎の森と申します。先ほど教育の話がありました。私は被爆地の長崎で学生時代から毎年、夏

休みである八月九日は登校日で、被爆者の話を聞き、それぞれ自分たちが学んだことを発表して、また卒業して僧侶になってからも、原爆慰霊ということで携わらせていただいた手前、戦争や平和を考える機会が比較的多かったと思います。

長崎のお位牌の話で申しますと、長崎の爆心地に近いところのお檀家さんを回らせて頂いた時に、いわゆる棟板・棟札のような、大きなお位牌が祀っているところが多くございます。それは性別もそれぞれ違いますし、俗名もそれぞれ違います、裏返してみると、亡くなった日は全員、昭和二十年の八月九日でした。長崎の方では大体供養は五十回忌をもって閉じます。ですが、そのご家庭では、八十年を迎えようとしている今なお、大事にお祀りしてご供養されています。

これは全国的な問題ですが、だんだんと戦争の直接的な体験、被爆体験をされた方が少なくなっていたり、あるいはその方を弔い、ご供養されているところがだんだんと少なくなってくる中で、私たちが慰霊をしたり、祈りをささげたりというところでも前衛的に、平和を構築するためのアクションではないように捉えがちです。しかし、慰霊というものについては二つの側面があって、一つは過去を振り返ること、もう一つは未来を紡いでいくことだと考えています。

そういう意味では、悲惨なことがあったという事実、そこに悲しみ、苦しみが生まれていたんだという現象、過去を振り返って、過去を掘り起こして、その供養を通してお話を聞き、またそれを次の人たち、目の前の人たちに伝えていくのが私たち僧侶の役割であって、また、慰霊を務めていくということの意義ではないかという考えを座長の石原上人にお伝えさせていただきました。

菅野 ありがとうございます。石原上人どうぞ。

石原 森上人、ありがとうございます。前段階はその通りです。うちの第四分散会には、全日青の関わりの方々が大勢いらっしやった。考えてみれば私が知らないお上人も、お互いに全日青の活動とか、あるいは行脚とかで、色々な繋がりがあつたようでございます。

私が感銘を受けたのは、原爆の慰霊それから沖縄もそうですが、特に広島原爆の慰霊に参加したときに、森上人のお言葉は、かわいそうだね、残念だったねとともにありがとうございます、そしてともにありがとうございますという気持ちが湧いてくる。原爆で亡くなられた方々が身をもって被爆をされたことで、三発目の原爆が落ちなかつたよねというようになことを思うと、まさに感謝だと。ですから、ありがとうございますという気持ちになる。それを考えてみると、死んだら終わりではなくて、亡くなった方々がだめだったというわけでもなく、それがいわゆる供養ではないのか。供養の大事なことは決して慰霊だけではなく、その人たちが亡くなったことも、一つには平和の礎になっているのではないかという、本当に貴重なお言葉をいただいたということを申し上げます。

菅野 ありがとうございます。恐らく、それぞれの地域において、様々な戦争犠牲者の方がおいでだったと思います。赤堀所長も、七月の十日に仙台の空襲に対する慰霊法要での講話に行かれました。このような慰霊はそれぞれの場所であると思います。関東、東京に住んでいる者は、やはり大正十二年の九月一日に亡くなった方も多い、昭和二十年の三月十日に亡くなった方も多い。三月十日については明らかに戦争の直接の犠牲者である。もちろん広島・長崎の方々にとってもそうです。

それぞれ日時は違っても、供養の意味というのは、今、森上人、それから石原上人が語っていただいたことに繋がっているのではないか。この辺につきましても、お弔いという意味においては、第五分散会でも何かお話があつたようです。

河崎 森上人、本当に貴重なご報告ありがとうございました。私どもの第五分散会の中では三つの島に分けてという話をしましたが、その中で非常に面白いと思ったのが、心というところに焦点を当てて今の戦争・平和、そして宗教・仏教というところに論点を当てて、まとめて議論していただく方々の中に、実は弔いということが非常に大事である。私たちは弔う、弔いということを大事にし、弔いは平和を祈ることに相通ずるといふご報告がありました。

菅野 では、ここからの話ですが、来年は終戦八十年になります。二十年前の平成十七年には同じようなテーマを中央教化研究会議で扱っています。その当時はまだ、戦争の記憶が今よりも少し鮮明でした。例えば私の両親ぐらいだと戦争体験者です。直にそういう方々に聞いた話を知っている、あるいは本当に戦地に行った方がいるという時代に行われた教研会議だったので、生々しい分、なかなか冷静な議論にならないという部分も確かにありました。

私も戦後生まれで、戦後生まれではない方はここにいないと思います。戦後生まれの人間が戦争をどう語るか。そして二十年後に、石原さんが分散会で言っていた、二十年後にまた同じようなことがあったとき、我々は同じ状況でいられるか。どなたかが、「こうやって茶飲みながら戦争と平和を語るんだから、俺たちは平和ってことですね」なんて話していましたが、まさにそのように同じ状況でいられるのか。もしそうならなかった時のために、戦争に向かつての社会全体の危険度が上がっていく中で、今度は二十年後に向けて、私たちはどういう動きをしていくべきなのかという話です。

終戦八十年を迎えるということもそうですし、現代の日蓮宗がこれから何を発信していくのかということについても、各分散会の座長さんに答えられる限り、個人的な意見が入っても結構なのでお話をお願いします。柴田上人からお願いします。

柴田 主任のご質問とは若干ずれるのかなと思いますが、第六分散会では善知識、たとえ敵であってもその中に何とか仏様を見つけるのがわれわれ日蓮宗における法華経の回向の教えではないかということで、いかに善知識として捉えるかというところに、後半の議論は集中いたしました。その中で、やはり憎しみの連鎖を断ち切るというお話が出てまいりました。

原子爆弾が落とされて、二十万人死んだ町がございます。私の親族でも被爆二世、三世が大勢います。普通これだけ酷いことをされたら、憎しみが湧いて許すことはできないものだろうと思います。ですが、広島の間人というのは、憎しみの連鎖を断ち切る努力をしてきたわけでございます。外国人の方が来られて原爆資料館に連れて行って、「そこで謝れ」とか、「このやろう」とか、そんなことは一切言いません。ただ、「今あなた方が持っている核兵器を使ったらこうなるということを知ってください」というスタンスでございます。

憎しみの連鎖を断ち切るということが、先ほどの菅野主任の振りとは若干ずれるお答えにはなるとは思いますが、分散会の後半で出てきた話でございました。

菅野 大事なところだと思います。憎しみの連鎖を断ち切るということをメッセージで届けておくべきだということはあると思います。次に河崎上人お願いします。

河崎 やはり来年八十年というところのキーワードは今までの宗門、または私たち教師のあり様を見るに声明文は出すべきだと思います。そして、宗門としてある程度の総括を示す体制が取ればいいのかというお話が多く出ておりました。

その上で有事が起こった場合に私たちはどうあるべきなのか、国はどうあるべきなのかというお話も皆さんがされ

ておりました。やはり防衛という意味での抑止力は、しっかり持つべきではないかというお話が出ておりました。だからこそ私たち宗門人、また仏教界はその過ちを犯さぬよう、そして繰り返さぬよう、総括する必要があるのではないかというお話がありました。

**菅野** ありがとうございます。では続きまして、石原上人お願いします。

**石原** 第一に、先ほど森上人から出た長崎の被爆の件もそうですが、まず慰霊をして、平和を祈りながら語り続けること、あるいは一つには広島や長崎や、あるいは災害で被災した土地もありますが、それが起こった現実をいかに伝えていくか、伝え続けていくか。

私はちょうど二十年前に同じテーマで座長を担当させていただいて苦労した経験があつて、今回もドキドキしながら務めたところでございます。当時は、戦前生まれのお上人が半数以上いました。戦後の若い参加者もいた。そうすると、戦前と戦後で全く認識が違つていてどうしようもない状況でした。ですからこれから十年、二十年先どうなるかなど考えていますが、そこで大事なことは今日皆さんが仰つていただいたように、戦争を起こさないために何をすればよいのかという問いに対して、皆さんに言つていただいたことは、日常の中で我々ができることはこれだよということではなくて、それぞれが今現在されていることが一番大事なことだという話です。

そして櫻井先生に仰つていただきました、死者を死者のままにしない、供養をする、回向をする、慰霊をする、これは日本の仏教の文化で大事なことだと。だから我々も供養をする立場にあつて、宗教者としての役割の中で、歴史を風化させないということがこれから問われてきます。そこを大事にしなければいけないということでもございました。

菅野 ありがとうございます。では続きまして、加藤上人お願いします。

加藤 戦後八十年ということで、最近印象に残った「新しい戦前」という言葉を聞いて、世界的にそういったきなきない雰囲気もあるのかなと思いつながら、分散会で話をしていました。その話し合いの中で出たのは、やはり戦時中との反省を宗門として出すべきではないか。あと、平和への声明も積極的に出すべきではないかという意見もありました。私がそこで考えたことは、そういうものが出たとして宗門の教師がどれほどそれを認識しているかという事です。

ついこの間まで宗門運動があつて、その検証をするということでも現宗研がその分析をしましたが、結局宗門運動がどういふものであつたのか、何がテーマであつたかもほとんど教師が知らなかつた。これから反省文を出す、声明文を出して、皆さんがどれほどそれを認識して、理解して日常の布教に生かしていくことができるのか。

「いのちに合掌」だとか、「但行礼拝」という言葉も出ましたが、その一つ一つについて、どれほどその言葉の意味を理解して、納得して、それを檀信徒なり未信徒の方々に伝えていけるか。そのこともあまり考えずに、何か宗門から来たなという程度で済ませてしまっているのが現状ではないでしょうか。これが、大変問題なのではないかと思つました。

戦争を起こしていくのも空気感だと言いましたが、今の宗門の空気感を作っているのは我々ではないのか、我々が教えを学びそれを修行して、今やっていることが正しいのかどうかということを検証する。

この中央教研も、我々の言動と行動が正しいことなのかを話し合うものではないだろうかということも発言させていただきました。先ほど、宗教間対話についても、自分たちのことを知らずして、他宗教との対話ができるのだろうかと思つたこともあります。

菅野 はい、ありがとうございます。灘上上人お願いします。

灘上 先ほど石原上人から二十年前の話がありました。私も二十年前の生き残りでございます。その当時、私は全体会議の座長をさせていただいて、この壇上に、日蓮宗として戦争責任を問うてアピール文を出すか否かというのをやりました。賛成側と反対側に分かれまして、私は間に挟まれて苦労した記憶がございます。結果としては出しませんでした。

その当時、戦争時代に学生で軍国的な教育を受けていた方もいました。親戚が出兵して戦死された方、そういう方もいたので、その方が叔父さんのお位牌を持って来て、戦争は反対だけれども叔父の死を考えると参議はできないというようなことを仰って、それをなだめるというか、抑えるのが大変だったことを今でも覚えております。

例えば、日蓮聖人のご遺文の削除、例えば天皇に対するとか国家に対すること、その当時の社会としては不適切な文面は黒い墨を塗ったとか、あとそのときは話が出たか分からないですけれど、お曼荼羅の天照大神が下に書いてあるのは天皇家を非難することだということで、紙を張ったなんていうような事実もある場合がございます。

それに対して神奈川県の一部合同の研修会でそのお話が出たときに、ご老僧が烈火のごとく怒って、「それをやらなければ宗門は潰されていたんだ、今の若い奴がそんなことを言うな」と、講師のことを怒ったことがあります。やはり戦争を体験されている方とそうでない方では考え方や意識が違うなと思えました。来年、戦後八十年ということで、徐々に戦争体験者が鬼籍に入られて、いずれは戦争体験者がゼロになる時代も来ます。

ですからアピール文を出すのであれば他人事でないという事、本当に戦争にならないように、平和の大切さを人に伝えられるようなアピール文を出す。やはり今、このときに議論を尽くすべきではないかなと考えます。

菅野 ありがとうございます。私も個人的なことで恐縮ですが、二人の戦死した叔父の遺骨は一片も戻ってきていません。そういう方々は、この中にもいらっしやると思います。そういうことに関してのメッセージは、本当に同じような気持ちの部分がありますね。ここに位牌を持って来る必要はないような気もしますが、気持ちは分かります。最後に及川上人よろしく願います。

及川 個人的な感想ですが、私は毎朝必ず平日にNHKの朝ドラを見ます。原爆裁判の判決文、この中でも見た方がいると思います。判決文が読まれるというシーンでした。ですから、うーんと思いつながら聞いておりました。

私の出身は東京の八王子ですが、八王子は昭和二十年の八月二日に空襲があつて、旧市街地の八割から九割ぐらいが焼かれた。その旧市街地の中に、いま私が住職している寺も含まれておりますので、お寺もすべて焼かれたというようなことは、子供の頃からよく聞いておりました。ですから間接的ではありますが、お年寄りを含めて、そのような方々から話を聞くというような機会がありました。

この二日間、仏教から平和と戦争を考えるとというような話のテーマでございました。私は第一分散会に参加していて、この中央教研に今回は四人、若い人が参加していて、その中の一人が私の分散会にも参加していました。二日間にわたつて非常に良いことを言うなと思いつながら感心して、二十代の若者の発言を聞いておりました。私たちが、持っているスマホ。それが今は人を傷つける武器にもなるということを、その二十代の若者が教えてくれました。

そういったものを、便利なものとしてあたりまえに使っているわけですが、私たちはそれが人を傷つけてしまう可能性のある武器だという認識を、改めて持たなければいけない。つまり、原爆だとか、鉄砲だとか、そういう分かりやすい話ではなくて、もうスマホが武器になってしまうと。そういうようなことの前提の中で、私たちは人にもものを伝える役割を持っていて、スマホという身近にあるものが人を傷つける武器になりうるという事を意識して、人にも

のを伝えるという事をしていかなければならない。その二十代の若者が教えてくれました。すごく大切なことだと思います。

話は元に戻りますが、私が毎朝朝ドラを見ているのは、なぜ見ているかというと、お檀家さんや何かと話をするためでもあります。つまり、やっぱり共通のネタがあると、例えば、今日はいいお天気ですよねとか、今日は暑いですよねというのも一つの共通の話題ですが、朝ドラはドラマですけれども語られたこと、感じたことを、例えばお盆ですから棚経に伺うとか、そういったときにも話ができるわけです。そのために、朝ドラを見る。結局、そういうことが平和だなということを思いました。ありがとうございます。

**菅野** ありがとうございます。スマホが武器になるというお話大変興味深く聞かせていただきました。スマホという我々の身近にあり生活に溶け込んでいるもの、これは人の生活を豊かにする半面、言葉で人を傷つける武器にもなってしまう。時にはそれがインターネット上での言葉の争いに繋がり、その中で人が傷ついていく、最悪の場合は死に繋がる可能性も孕んでいます。戦争というと国家間で銃や爆撃機、戦車などの武力を用いて行うものというイメージがありますが、スマホが武器になるという意味ではインターネット上で既に戦争は起こっているということなのかもしれません。だからこそ我々はその正しい使い方を知っておかなければならないと改めて考えました。

今回の全体会議では、非常に興味深いお話を頂きました。皆さんには二日間で仏教から戦争と平和を考えていただきました。考えていただいて、難しかったなという方もいらっしゃるかもしれませんが。何を語ればいいのかと思うながら始めて、何となく自分の思いは語れたという方もいらっしゃるかもしれません。なかなかそれについては、こちらのマネジメントの問題もありまして、皆さんの満足いく結果が生めなかったとしたら、大変申し訳ありません。変則的ではありましたが、少しそういったところを攻めてみようと思ったのが、今回の中央教化研究会議でございます。

した。ご理解いただきまして、何らかのヒントを持って帰っていただければと思います。

今日の最後の座長会の中でも、自前の会議で言うのはなんです、大切なヒントはあったのではないかと思います。昨日の基調講演も『所報』に掲載されますからそのときにまたご覧になってみていただければと思います。今回議論の参考にさせていただいた、石川明人先生や星川啓慈先生の論文もネットで見られるものですから見ていただいてもいいと思います。大変示唆に富むものだと思います。

宗教が戦争の直接の原因になるかどうかは分かりませんが、私達は宗教が戦争の原因になることもあり得ると考えて良いし、我々はその危険性の中で何を基にしていかなきゃいけないのか、加藤上人がおっしゃったように我々はずっと自分の宗派を知らなければならないということかもしれません。その宗派の教学と歴史を知らなければならないと思います。

第三分散会でも出ておりました。戦前に私たちの宗祖の言葉がどのように利用されたか。そして、その利用された事をいま我々はそのまま知らぬ顔で放っておいてよいのか。それを明らかにすることが、私どものやるべき仕事ではないかと思いました。今後どのようなか分かりますませんが、そういうことも視野に含めていきたいと思っています。

それでは、これをもちまして全体会議を締めさせていただきます。座長さん、ご参加の皆様、本当にお疲れさまでございました。ありがとうございました。